『十牛図』についての教育哲学的一考察（その１）

－ボルノー，フランクル，ブーバー，森有正，の思想に依拠しつつ－

広　岡　義　之

An Educational Philosophical Investigation of “The Ten Ox-Herding Pictures” (The First Volume)

－Focusing on the Thought of Bollnow, Frankl,Buber and Arimasa Mori－

Yoshiyuki HIROOKA

要　旨

本稿では，『十牛図』で提示されている実存的な真理が，ボルノー，フランクル，森有正，ブーバーのそれぞれの実存思想と深く共鳴していることを浮き彫りにすることにある。さらに，『十牛図』がたんに禅宗のテキストという範囲内にとどまるだけでなく，さらに幅広い学問領域，たとえば教育哲学領域の真理探究にも応用できることを明示することにある。

キーワード：『十牛図』，実存思想，自己超越，ボルノー，フランクル

はじめに

本稿の目的は，『十牛図』で提示されている実存的な真理が，ボルノー，フランクル，森有正，ブーバーのそれぞれの実存思想と深く共鳴していることを浮き彫りにすることにある。さらに，『十牛図』の東洋的な実存的思想が，こうした他の西洋の実存哲学思想とも深く呼応していることを傍証することを通して，『十牛図』がたんに禅宗のテキストという範囲内にとどまるだけでなく，さらに幅広い学問領域，たとえば教育哲学領域の真理探究にも応用できることを明示することにある。本稿では，『十牛図』で提示されている実存的な真理を，ボルノー，フランクル，森有正のそれと各々，比較考察することが中心テーマとなる。

第１節　「第一尋牛」とボルノーの「空間論」

第１項　見失われた「心牛」を尋ね求める第一段階

『十牛図』の第一段階は，見失われた「心牛」を尋ね求めるところから始まる。真の自己を求めるということが，真の自己のはじまりでもある。若者は「『なくてはならぬ唯一つのもの』を見失っていることに気づき，驚いて探し求めはじめるが，しかしどこに求むべきか，また求めているものが果して何か，彼にはまだわからない」。（上田，1982：19）

人が牛を探し求めるところから『十牛図』は始まるのであるが，これは，本当の自分はどういうものかということを探し始めることを意味する。

（上田，2002：23）真理を求めてもそう簡単には，本当の自分や真理は与えられないが，しかし求めるところから出発する以外に手立てはない。「第一・尋牛」とは，牧童が見失った牛を探し求めることである。（上田，2002：25）

第一・尋牛

第２項　ボルノーの空間論と「第一・尋牛」

『十牛図』についての著作のある西村惠信の指摘によれば，いくら廓庵が「素晴らしいものがあるのに，家を出ていったい何を求めようとするのか」と批判しても，理想を求めて家を出ることは，人間の歩む方向としてはむしろ正しいことだとボルノーに即しつつ主張している。西村惠信は，ドイツの教育哲学者ボルノーの哲学的主著『人間と空間』（大塚他訳，1978）を詳細に援用して次のようにボルノーの空間論を展開している。『人間と空間』第２章「広い世界」の箇所で，ボルノーは次のように考えている。すなわち，人間は狭苦しい空間に住んでいると，それが自分を悩ます圧迫であるように感じ，開放的な「広い世界」へ出ようとする。憧れの対象となる広い世界には具体的な目標というものはないが，解放されたいというあこがれがある。「広さ」には徹底的に「方向がない」ということが含まれる。ボルノーは住み慣れた家から外に出ることを，「見知らぬ世界」との出会いと定義づけている。家を出ると，見知らぬものに出会い，慣れたものが揺らぐ経験をし，不愉快なよそよそしさを体感する。それにもかかわらず，人間は見知らぬ土地に出かけて何かを学ぼうとする。（西村，2008：29-30）私見によれば，こうした「経験」は，「抵抗経験」とボルノーによって定義づけられており，ボルノー哲学の重要概念の一つとなっている。この「抵抗経験」の特徴については，後に詳述することにしたい。

第２節　「第一尋牛」とフランクルの「自己超越」

第１項　自己であることは「自己超越」であることをわからせることが『十牛図』の目的

元来，目覚めている人間が，目覚めようとしないところに人間存在の根本問題がある，と上田は鋭く指摘している。本当の自分から乖離してしまい，ついに人は本来の自分を失うことが人間存在の問題点である。そして問題は，自分本来の場所から遠ざかることから生ずる。（上田，2002：27-28）

「第一尋牛」では，すでに牛は存在する。しかし，それに気づいていないことに気づかせるのが『十牛図』の重要な目的なのである。教育学者の生越達（おごせとおる）によれば，概して私たち人間は，安定した生活を求めて日々を生きている。それゆえ，自己をも対象化し，物として把捉しようとする。（生越，1997：91）このことに関して，生越は次のように述べている。「『十牛図』はそこにある自己がどんな自己であろうとも，それを本来的自己から疎外された自己として超越していくことを求める。自己であることは自己超越という作用である。」（生越，1997：91）

第２項　フランクルの「自己超越」

『十牛図』において，自己であることは「自己超越」という作用であることが生越の指摘でも明確になった。この点で『十牛図』の「自己超越」と，フランクルが人間の本質を「自己超越」として把捉していることとの間に，深い共通項のあることが読み取れる。以下ではこの点について，フランクルの見解を考察してみよう。

フランクル研究に造詣の深い岡本哲雄は次のように考えている。フランクルは，私たちは生きる

態度や視点の「コペルニクス的転回」をおこなわねばならないという。つまり，「人生に何かを期待する」態度（私のために）から，「人生は私に何を期待しているのか」を聴き取り，それに具体的な行為によって応答していく態度（私は何・誰のために）への転換である。自分の「自己中心性」を転回させ，ある事柄やある人が，他ならぬ自分を待っているのだ，自分に問いかけているのだと自覚できるときに，そこにその人独自の「生きる意味」が発見されると同時に「私は何・誰のために」という「自己超越」の観点が生じるという。（岡本，2022：87）そしてこうした在り方こそがフランクルのいわゆる「自己超越的」な在り方であり，生越達の先の文言，「『十牛図』はそこにある自己がどんな自己であろうとも，それを本来的自己から疎外された自己として超越していくことを求める。自己であることは自己超越という作用である。」とみごとに符号していると筆者は考える。

別言すれば，次のようにも表現できるだろう。岡本はフランクルの中核的概念である「人生の観点のコペルニクス的転換」を援用しつつ，近代以降の人間は，常に自己を世界の中心に据えた立場から，もっぱら「私は人生に何をまだ期待することができるのか」を問うてきたという。つまり，人間の自己中心性は人間存在の属性であり，すべてを拭い去ることはできないものの，人間のエゴイズムが現代という状況のなかで肥大化し，生の可能性を矮小化していることが深刻な問題である。その結果，教育そのものが視野狭窄に陥ってしまった。岡本はそれを「私は，教育（子ども）に何を期待できるか」と教育分野にみごとに転換した表現に言い換えて，私たちに提示してみせた。フランクルはさらに続けて言う。「私は人生に何をまだ期待することができるのか」が問題なのではない。「人生は，私に何を期待して（呼びかけているか）を聴き取る」ことが重要であり，それに具体的な行為によって応答しそれを習慣化することが大切である。（岡本，2022：218）「人生は，私に何を期待して（呼びかけて）いるかを聴き取る」というフランクルのテーゼを，これもまた岡本は教育領域にみごとに転換させて，「教育（子どもと共に生きるこの状況）は，私に何を期待して（呼びかけて）いるか」と問うていく。岡本は，ここでフランクルのコペルニクス的転換の人間学的視点を，みごとに教育学的視点へと転換できている。（岡本，2022：157）

第３項　人間の「超越性」は責任性のなかに示されている（フランクル）

「自己超越性」との関連でいえば，フランクルは，人間は自己超越的であるときにのみ，「責任存在」という人間固有の特徴を有する，という。それゆえに，人間は「責任」に対する自由性を果たすことを自覚できたときにのみ，真の自由を獲得できると言い得る。「人間の存在性が自由性のなかにあらわれ，人間の超越性は責任性のなかに示されている」（Tweedie，1961：61　武田，1968：63）と言われる所以であろう。人間は日常生活のなかで，自己超越を通してのみ，価値を実現し，現実化する「責任」を持つ存在なのである。私見ではあるが，たとえば責任性を見失い不安定な学業生活を送っていたある青年が，大震災の後に現地でボランティア活動を無心に行い，被災者の方々から深く感謝され，はじめて自己存在の価値に気づき，責任性を全うできたという事例は，こうしたフランクルの「自己超越性」や「責任存在」という知見の実例として有効であろう。

第３節　『十牛図』と森有正／ボルノーの「経験」概念

第１項　登校拒否児の傾向と対置する「経験」

生越達によれば，登校拒否児は一般的に，自己を未来へと開いていく「他者」を初めから拒否するという。自己の存在の場が危うくなれば，その場を狭め，家に引きこもることで自己を死守しようとする。生越達は上田閑照を援用しつつ，『十牛図』においては，真の自己に徹した自覚の光によって照らされて，その都度の自己から越え出て自己に徹する道が開かれると主張する。自己は現在の自己とは別の場所に「本来的故郷」を持つと

いうのである。『十牛図』において，自己を求めることは，まず自己から遠ざかること，旅することであるとの言説は深い哲学的内容を包含する。（生越，1997：92）

『十牛図』の第一段階から第十段階までの歩みが，「第一•尋牛」の牧童から始まり，それが「第十・入鄽垂手（にってんすいしゅ）」に到るまで，遠ざかり，旅する過程であるとも言えるだろう。こうした『十牛図』の自己の在り方は開かれた「経験」であり，登校拒否児の他者を拒否する在り方と対極に位置するのである。

自己を求めることは「自己から遠ざかること，旅すること」という『十牛図』の思想についての生越達の文言は，森有正とボルノーの「経験論」概念ともみごとに符号する。（広岡，2015：3-12，164-169）両者の「経験論」においては『十牛図』と類似の実存思想を展開しているので，以下で紹介してみたい。

第２項　森有正における「経験」と「体験」

森有正によれば，「経験」とは私たちが現実に経過する行為を通して私たちの内側に獲得される「あるもの」であるのに対して，「体験」は単に機械的に増大し，瞬時に忘れ去られるものと考えられている。私たちは日常，「体験」という偶発的な出来事に接触しているものの，それらはほとんど「物象の変化」という出来事と変わりがない。（辻，1977:191-192）「体験」的あり方においては，全てが主観の歪みのもとに置かれ，それに自己満足し，安易に安住してしまうと，森は人間の道徳的弱さを鋭く指摘する。（辻，1977：192）

他方で森有正は，「経験」的生き方とは，受動的に身に味わうこととは反対に，「経験」を通して自己を乗り越え，自己の主観的な狭さを突破してゆくことを意味すると述べている。「経験」とは，ある根本的な発見があり，ものを見る目そのものが変化し，見たものの意味が全く新しくなることである。したがって「経験」が深化するに伴い，その人の行動そのものの枢軸が変化していく。「経験」そのものは自分を含めたものの本当の姿に一歩近づくことであり，むしろ客観的になることである。（森，1976：54-55）こうした森の「経験」概念は，まさに『十牛図』における牧童と牛がそれぞれの段階で変化していく過程と深く呼応している。特に，「『経験』が深化するに伴い，その人の行動そのものの枢軸が変化する」という森の先の解釈は，まさに『十牛図』の各段階への進行ごとに牧童の行動の中核が「真理」へむかってある意味で客観的に変化していくことと深く呼応している。

「新しいものを自己の体験で理解しうるものに変化させようとする傾向」に徹底的に反抗し，自己を「透明化」し，「もの」が真に「もの」に還るのを待つあり方そのものが「経験」を深めてゆく道に他ならないと考えた森有正はさらに続けて言う。体験的に成立してくるものに反抗し，最も深い意味で自分自身に反抗し，「促し」に従って自己を求めていく時に堆積してくるものが「経験」である。（辻，1977：194）フランクルもこれと同様の表現をしている箇所があるので明示しておきたい。岡本によれば，フランクルの臨床哲学は「有限なるものと無限なるものが接するところ」を「意味」の場所としてそこを中心に「人間生成」を捉えようとした。その臨床知には，この「意味」から「日常を透明化」（有限なる日常世界の自明性を，無限と接する地平において受け取り直すこと）するための方略が込められているという。（岡本，2022：220）ここで森が指摘する自己を「透明化」するという理解と，フランクルが「意味」から「日常を透明化」するという理解はきわめて深い意味で符号する思想である。

第３項　『十牛図』の歩みと森の「抵抗経験」の共通点，森の「意志」とフランクルの意味への「意志」の共通点

森有正研究者の釘宮明美は次のように「経験」を捉えている。他なるものと自己とが最も深い接触をし，それによって自分がある変容や変化を受けて新しい行為へと転じられ，そこに「これが私である」と自己を定義する形が露われはじめること，このような存在の仕方の転換，視野の転回が「経験」である。（釘宮，2004：6）『十牛図』にお

ける牧童の旅もまた，こうした存在の仕方の十回の転換，存在の在り方の転回の「経験」とも言いかえることができるだろう。

「経験」的あり方とは，このようなあるべき本来のものに向かっての歩みであり，その歩みを支えるのが「内なる促し」に他ならない。その意味で「経験」とは，ものと自己との間に起こる抵抗の歴史であるとも言えよう。まさにこの「抵抗」こそが，自己の恣意性や主観性を破壊するための聖なる鉄槌（てっつい）となる。そしてこのうちおろされる鉄槌の打撃に耐え，自己がくだかれ，新しい自己の誕生をもたらすものが森有正によって人間の「意志」と名づけられた。（辻，1977：194）そして『十牛図』の十の各々の歩みもまた各段階で，聖なる鉄槌の打撃が加えられ，真実の人間へと変貌していく旅なのであると言い得るであろう。

これとの関連で，フランクルもまた意味への「意志」という表現で，人間の意志の重要性についてしばしば語っている。フランクルは，ヨハネス・ランゲが報告した一卵性双生児の興味深い事例を紹介している。これは人間の意味への「意志」の重要性を考えるときに，極めて説得力のある内容なのでここで紹介しておきたい。たとえ遺伝がベースにある生化学的な問題であってもフランクルは宿命論的な結論を下すことに強く反対している。私たちは，自分の髪の毛の色を変えることは遺伝的に不可能である。しかし自己の意味への「意志」は遺伝によっても環境によってもけっして拘束されないことを次の一卵性双生児の事例で強調している。一方は抜け目のない犯罪「者」になり，他方は抜け目のない犯罪「学者」になった。「抜け目がない」という性格特性については，遺伝が影響しているかもしれないが，犯罪「者」になるか犯罪「学者」になるかは遺伝の問題ではなく，個人の実存的態度の問題であると，フランクルは喝破している。遺伝はあくまでも人が自分を作り上げていく上での素材にすぎないのである。人生途上で様々に打ちおろされる鉄槌の打撃に耐え，自己がくだかれ，新しい自己の誕生をもたらすことができたときには，犯罪「学者」になりうるが，鉄槌の打撃に耐えられずにそれを回避し安易な生き方を選択してしまうと犯罪「者」になりうるのである。（広岡，2014：210）

第４項　ボルノーの「経験」の苦痛性と『十牛図』における苦痛性の一致点

森有正の「抵抗」概念と同様，ボルノー（Otto Friedrich Bollnow，1903-1991）もまた人間の生成に深く関わる「抵抗」概念の重要性について人間学的に次のように述べている。「一般に，歴史的経過において，おのおのの精神的運動は一つの抵抗に直面して始めて目的を達することができる。（中略）このことは精神生活の最も基本的な，その根本的意義においておそらく十分には評価されていない事実の一つである」。（Bollnow，1949：63　小笠原，1978：109）

人間の全ての精神的形成は，「抵抗」という敵対者を絶えず考慮してのみ行われると考えるボルノーは続けて言う。「ある敵対者との対決においてはじめて，精神的運動は自己自身についての内面的確実性と明晰性にいたるのである」。（Bollnow，1949:64　小笠原，1978:110）「抵抗」概念を高く評価するこのボルノーの言説は，森の指摘する「経験」の不快感や苦痛性という思想とその本質において深く共鳴している。（Bollnow，1970：130.　西村，1975：231）私見によれば，また『十牛図』においては，牧童は牛というある意味の「他者」「抵抗」と相対する苦い経験を経て，自己が深められていく旅である，とも説明することが可能であろう。

このような「抵抗」概念の重要性を唱えるボルノーは，「経験」とはその本質において不愉快なものであると言う。だからこそ，「経験」というものは，総じて辛い苦しい経験であり，その「経験」をひとは自分の身体でなし，誰も免れさせてはくれない。これとの関連で，ボルノーはガダマー（Hans-Georg Gadamaer，1900-2002）に依拠しつつ「経験」の苦痛性を以下のように鋭く説明している。生が乱されずに経過し，全ての期待が満たされる限り，全ては順調に推移し，そこでは何

ごとも「私」に襲いかからないが，期待が欺かれ，途上に予期しない妨害が出現するとき，はじめて人間は彼の経験を「する」(machen)。この「する」(machen）という性格には，苦しみを堪えること，生の困難さに引き渡されているという意味が含まれるという。(Bollnow，1970：130f.　西村，1975：232）ここでもボルノーの「抵抗」概念と森の「経験」概念に共通する「苦痛性」という人間の生を深める要素が含まれていることを私たちは認識できる。そして牧童が各段階で経験する「苦痛性」を乗りこえながら次のステージへと飛躍していく点でも，『十牛図』における「苦痛性」はその核心となっていることが私たちには明確に把捉できる。

第５項　ボルノーにおける開かれた「経験」としての徳性

閉ざされた「体験」は自分自身のなかに閉じこもり，けっして自分を越え出て行くことはないので，「体験」の記憶だけが当の人間のなかに止まるのに対して，厳しさと苦痛を伴う開かれた「経験」は当の人間の持続的変化を引き起こす可能性を有するという。(Bollnow，1970：132.　西村，1975：234-235)

この意味で，開かれた「経験」は閉鎖的ではなく，経験を訂正する新しい経験に対してつねに開かれているために，「経験」は他人に対して，これまでの自己の枠を打ち砕く新しい試みでもあるとボルノーは把捉した。(Bollnow，1970：136f.　西村，1975：242-244)

この常に前進して深まり行く開かれた「経験」というボルノーの理解においてのみ，「成熟さ」がじょじょに形成されてゆくのであり，これは苦痛性と抵抗性を伴った「経験」概念におけるボルノーの一つの卓越した人間形成論とみてよかろう。「人間が究極の成熟に達しうるのは，深い苦しみの経験と，そのなかに含まれている自分の能力の限界の知によってだけである。この成熟を追求する者は，これらの経験の苦痛性もまた覚悟しなくてはならない」(Bollnow，1970：137.　西村，1975：244）とは，まさに正鵠を射たボルノーの人間学的考察と言えるだろう。こうしたボルノーの言説を見ると，私たちは，「第一・尋牛」で牛を探し始めた牧童が，「第九・返本還源」までの各段階の苦痛性と抵抗性を伴った「経験」を経て，ついに「第十・入鄽垂手（にってんすいしゅ)」において，成熟した大人へと成長し，今度は自分がかつて第一歩を歩み出したように，新たな牧童に対峙する姿を見る。こうした『十牛図』理解もまた「一つの卓越した人間形成論」以外の何ものでもなかろう。

人間がする「経験」のなかには，すでに退廃の危険性も一緒に含まれており，あらゆる「経験」には，永続的な固定化と硬直化の危険，すなわち「体験」への堕落が潜んでいるとボルノーは警告する。その意味でもボルノーは「新しいものへの開放性はけっして自然の賜物ではなく，労苦して獲得されなくてはならないひとつの徳」(Bollnow，1970：137.　西村，1975：244）であることを強調する。私たちは，ここでも近代教育学が見落してきた，開かれた「経験」概念を前提とした教育事象の意義を見出すのである。『十牛図』「第三・見牛」で反省が欠けると，「天狗禅」になる危険性が上田によって示されているが，この危険と，ボルノーが指摘する「経験」には，永続的な固定化と硬直化の危険，すなわち「体験」への堕落が潜んでいるという危険は，共通項を有する人間の精神的な深刻な問題である。

第６項　「第三・見牛」で反省が欠けると，いわゆる「天狗禅」に陥る

上田によれば，「第三・見牛」においては，一瞬のうちに全真理を「見る」という経験があるために，「見性」ということに特別な意味が見出されることになる。見られたものが具体的な日常経験のなかで，あいまいになったり，矛盾することも事実である。上田はこの点について興味深い一文をしたためている。「ここに行に関わる一つの大きな問題点があります。ここで反省が欠けると，いわゆる『天狗禅』になります。」と。(上田，2002：101-102）一瞬，「悟った」と禅で言われることがある。しかしそれは嘘ではないが，それが

本当に生きて働くためには，「見る」だけでは不十分であり，見たものを自分自身がその都度の在り方に即して実現していくことが求められる。(上田，2002：102）ここにもボルノーの「体験への堕落」という精神的な問題との共通点が読み取れる。

第３節　「第二・見跡」「第三・見牛」とボルノーの庇護性の符号点

第１項　「第二・見跡」は，言葉を通じて，真の自己とは何かがわかる段階

「第二・見跡」は，言葉として牛が残した足跡を見つけることである。これの意味することは，言葉を通じて，真の自己とは何かがわかる段階である。（上田，2002：36）若者はようやく，牛の足跡を見つけた。そのことで，教えを学び，法理の上で，真の自己の在り方の見当がついたことになる。教えを受けるその言葉も真の自己の足跡であると，『十牛図』では考えられている。真の自己としての言葉が，ここでは足跡として表現されている。真の自己を求める人に対して，その真の自己という在り方の模範となる自覚の言葉が存在する。（上田，1982：22-23）

第二・見跡

第２項　走り去る牛の後半身が図に表れている「第三・見牛」

「第三・見牛」では，走り去る牛の後半身が図に表れている。牛を見つけた若者が牛に向かって突進していく状態が描かれている。そこで上田は言う。「見跡において答の見取図が言葉として与えられただけに，答として示され答として知解したものが自己の現実になっていないということがますます問題になる。そのようにして問になり切った彼の全身が，今や，『これだ！』という自己身上におけるその答の具体の萌しに向かって集中してゆく。実存としての『問と答』が身体上の具体的な力動となり，身についた生きたものとなってくる。」（上田，1982：25）

第三・見牛

具体的な見聞覚知においては，身体全体が動き出していく。「第二・見跡」で，「言葉」で理解したことが，今度は「第三•見牛」において「身体」で理解することになる。そこでは，牧童は駆けていく牛の後半身のみを見ているにすぎない。牛は逃げるように駆けていき，牧童は逃がすまいと懸命に追いかけているという状況である。（上田，1982：84）

第３項　包括的な存在信仰（ボルノー）としての「安らぎ」の徳と『十牛図』の符号

「第三・見牛」との関連で，生越達は以下のような興味深い指摘をしている。「牛は自己を常に待ち続け，自己のときどきの状態に応じて姿を現してくれていたのである。ここには牛の能動的受動性が示されている。本来的自己は実はそのときどきの自己の姿に応じて自己を求めてくれているのであり，その意味で自己を支え包んでいる。」(生

越，1997：92）

こうした『十牛図』についての生越の考えは，ボルノーの「庇護性」の概念と共通項を有すると考えられる。人間は庇護性を獲得することなしには安心してひと時も有意義に生き得ないとのボルノーの主張と軌を一にする。（広岡，2019：358-379）

ボルノーに従えば，人間はある特定の内面的状態にあるとき，初めて孤立した瞬間を乗り越えて，未来との支持的な関係を獲得することができる。そしてそれこそが，実存主義克服の一つの課題でもあった。この内面的状態を，さしあたり「安らいだ気持ち」と呼ぶ。現代の不庇護性に対抗する可能性が，決意性と絶対的自己投入を代表とする人間自身の最後の強さとして，見出されてきた。「決意性は，無信仰となった世界の最後の偉大さである」。（Bollnow，1979：59　須田，1978：67）そこで頼れるものは自分自身だけなので，人間の決意性は本質的に安らぎえず，寝つくことができない。これに対して「安らいでいる者」は，自分が倒れそうになるときでさえ，その自分を守り抱きあげてくれる力が湧き起こることを信頼している。ボルノーによれば，人間は「あらゆる威嚇の背後にはどうしても援助してくれる存在が（中略）控えていることを確信している，いっそう包括的な存在信仰の基盤のうえで，安らいでいる」（Bollnow，1979：63　須田，1978：67）ことができるのである。

ここで誤解してならないのは，「安らいでいること」が，素朴な安全さとして人間にむぞうさに与えられているのではない，ということである。（Bollnow，1979：65　須田，1978：67）つまり，この徳は，人間の力だけで獲得できるものではなく，「恩寵」として超越的に人間に授けられる一面がある。私たちは，ここに「安らいでいること」の特異なパラドクシーをみることができよう。人間は，どれほど勇敢な「決意性」をもってしても，彼の絶望的孤独からは脱しえない。「人間がこの孤独を克服して，ふたたび世界と生にたいする支持的な連関を獲得しようとするならば，人間は安らいだ生活態度の地盤においてのみ，これを獲得することができる」（Bollnow，1979：66　須田，1978：70）のである。生越達の言説，「牛は自己を常に待ち続け，自己のときどきの状態に応じて姿を現してくれていたのである。ここには牛の能動的受動性が示されている。本来的自己は実はそのときどきの自己の姿に応じて自己を求めてくれているのであり，その意味で自己を支え包んでいる。」（生越，1997：92）は，まさにボルノーの庇護性概念とみごとに符号することがここで理解できる。こうして『十牛図』に示される牛は，牧童を待ち続け，牧童の時々の状況に応じて，庇護し，支え包んでくれていたのである。

続く

引用・参考文献

- 上田閑照・柳田聖山著，『十牛図－自己の現象学－』，筑摩書房，1982年。
- 上田閑照著，『十牛図を歩む－真の自己への道－』，大法輪閣，2002年。
- 佐藤裕之著，『仏教と＜十牛図＞－自己をみつめる－』，角川書店，2005年。
- 生越達著，「引きこもりと自己形成－十牛図を手がかりとして－」，日本教育方法学会紀要，「教育方法研究」第23巻　1997年，89～97頁。
- 広岡義之著，『フランクル人生論入門』，新教出版，2014年。
- 広岡義之著，『森有正におけるキリスト教的人間形成論』，ミネルヴァ書房，2015年。
- 広岡義之著，『ボルノー教育学研究　増補版　上巻』，風間書房，2018年。
- 広岡義之著，『ボルノー教育学研究　増補版　下巻』，風間書房，2019年。
- 西村惠信（2008）『十牛図－もう一つの読み方－』，禅文化研究所。
- 岡本哲雄著，『フランクルの臨床哲学―ホモ・パティエンスの人間形成』，春秋社，2022年。
- O. F. Bollnow, Mensch und Raum, Kohlhammer, Stuttgart, 4, Aufl., 1980.　ボルノー著，大塚恵一・池川健司・中村浩平訳，『人間と空間』，せりか書房，1978年。
- Bollnow, Philosophie der Erkenntnis. Kohlhammer,

1970.　ボルノー著，西村皓•井上担訳，『認識の哲学』，理想社，1975年。
・Bollnow, Das Verstehen. Drei Aufsätze zur Theorie der Geisteswissenschaften, Kirchheim, Mainz. 1949.　ボルノー著，小笠原道雄・田代尚弘訳，『理解するということ』，以文社，1978 年。
・O.F.Bollnow, Neue Geborgenheit. Das Problem einer Uberwindung des Existentialismus. Kohlhammer, Stuttgart, 4 Aufl, 1979.　ボルノー著，須田秀幸訳，『実存主義克服の問題－新しい被護性－』，未来社，1978 年。
•Donald F. Tweedie,: *Logotherapy and the Christian Faith. An Evaluation of Frankl's Existential Approach to Psychotherapy*. Preface by Viktor E. Frankl, Baker Book House, 3 Auflagen, Grand Rapids, Michigan 1961-1972. S.49.　ドナルド・トウィディ著，武田健訳，『フランクルの心理学』，みくに書店，1968 年。
・森有正著，『経験と思想』，岩波書店，1977 年。
・辻邦生著，「解説」，『経験と思想』，森有正著，『経験と思想』，岩波書店，1977 年。
・釘宮明美著，「森有正の“経験”の思想」，2004 年，六頁参照。http://www.catholic-shinseikaikan.or.jp/gakushu/kansou/2004_9_12b.html

『十牛図』模写絵　元・示現会会員　中村 茂　作
オリジナルは京都相国寺蔵の伝周文筆「十牛図」である

第一・尋牛（じんぎゅう）

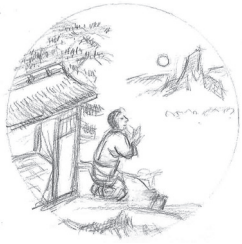
第二・見跡（けんせき）

第三・見牛（けんぎゅう）

第四・得牛（とくぎゅう）

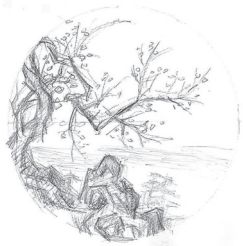
第五・牧牛（ぼくぎゅう）

第六・騎牛帰家（きぎゅうきか）



第七・忘牛存人（ぼうぎゅうそんにん）

第八・人牛俱忘（にんぎゅうぐぼう）



第九・返本還源（へんぽんげんげん）

第十・入鄽垂手（にってんすいしゅ）